東海大学紀要情報通信学部
Vol.9,No.1,2016,pp.15-20

トピックス

高大連携に向けての試み
ー付属高校での入学前英語講座ー

岡田 礼子*1

The effect of pre-entrance study at a university-attached high school

by

Reiko OKADA*1

(received on May 27, 2016 & accepted on May 31, 2016)

あらまし

グローバル社会で発信できる英語力を大学在学中に養成するためには，入学時に少しでも高いレベルから学習を開始する必要がある．しかし例年，付属高校出身者は潜在力をもっているにも関わらず，英語クラスの中位～下位レベルに集中し，目標に近づくことが難しい．その理由として，英語の学習を「苦痛」と感じていることが判明した．そこで，付属高校からの進学予定者を対象に，入学前学習会を実施し，英文の基本ルールを体系的に理解させ，自分で考えれば英文作成できることを体験させた．6回の学習会で，参加者の意識は大きく改善し，意欲的に学習に向かう気持ちが生まれた．

Abstract

In order to be proficient in expressing ideas in English in the global society right after university graduation, it is necessary for students to have fundamental English knowledge and motivation to learn from the start of university. However, there are many students who feel painful in study of English. Therefore, the author visited one of the university-attached high schools and gave lessons on basic English structures. Its aim is to have students think and create their own sentences using the basic rules they have just learned and have them feel enjoyment of learning. The results showed that almost all the students were more motivated and started feeling confident in studying in university.

キーワード: 高大連携，入学前学習，英語，基礎文法，考えて書く
Keywords: *liaison between university and high school , pre-entrance study, English, basic grammar, think and create*

1. はじめに

平成26年12月22日の中央教育審議会答申[1)]で，基礎学習不足で入学する学生の問題と英語教育の改善について，以下の通り指摘されている．

「基礎となる知識・技能自体の質と量が，大学教育に求められる水準に比して不十分な段階にある学生が多いことが深刻な問題となっている.」(p. 4)「国際共通語である英語の能力を，真に使える形で身に付けることが必要であり，単に受け身で『読むこと』『聞くこと』ができるというだけではなく，積極的に英語の技能を活用し，主体的に考えを表現することができるよう，『書くこと』『話すこと』を含めた四技能を総合的に育成・評価することが重要である.」(p. 7)

このような問題に対して，筆者が勤務する東海大学情報通信学部の英語教育プログラムでは，英語習熟度が低い学生向けのリメディアル教育を行いつつ，専門分野の内容を英語で発信できる力の養成を学部全体の目標として指導してきた．しかし，1～2年次の必修英語4科目だけでは目標に達することは非常に難しく，限られた時間の中で，どのような内容をどのような方法で指導すべきかを模索し続けている．そんな折に，中央教育審議会(2014)の「我が国社会の持続的な発展を実現していくためには，高大接続の改善が不可欠」(p. 8)という発表に背中を押され，付属高校との高大接続指導を試みることにした．

本稿では，これまでの本学部での指導を振り返り，今後の改善の一手段として試みた付属高校での入学前講座とその結果を報告し，今後の課題を考える．

2. これまでの問題

東海大学情報通信学部では2008年に学部を開設して以来，世界で活躍できる技術者の養成をめざし，専門分野の内容を英語で発表できるようになることを目標としてきた．しかし，学生の英語力には大きな差があり，また，英語に対する学習意欲が低い学生も多数いるため，必修科目では英語習熟度による8レベルのクラス分けを行い，各レベルの学力に合った内容で段階的に指導して，意欲的・継続的に学習に向かわせる様々な工夫をしてきた[2)3)4)]．その結果，学部内の英語学習に対する意識が少しずつ高まり，TOEIC受験者が増え，500点以上を取得する学生の数はこの数年で大きく伸びてきた[5)6)]．

しかし，セメスタごとに着実に学力を伸ばしても，

*1 高輪教養教育センター　教授
Liberal Arts Education Center, Takanawa Campus, Professor

目標に近づける学生の数は多くなく，次のことが問題となっている．(1)第1セメスタで中位～上位クラスに配属された学生は，所属クラスから下がらないようにと，互いに競い・協力して学習する傾向があり，力を高めるが，下位クラスでは，単位を落とさない程度の学習で互いに満足してしまう学生が多いこと．(2)下位クラスから段階的に積み上げて学習し，セメスタごとに力を伸ばしクラスが上がっていく学生も相当数いるが，下位レベルからリメディアル学習を経て実践で使えるレベルまで力を伸ばすには，1～2年次の必修だけでは足りないこと．

つまり，セメスタごとに学力を伸長させ，「本気で学習すれば目標に近づける」という気持ちを続けるためには，大学のスタート時に少しでも上のクラスに入ることがポイントとなると考えられる．中位クラスの学生が少しでも上位に近いクラスから開始し，下位クラスの学生が中位クラスに近いレベルから学習を開始できれば，意欲的に学習を継続する学生が増え，より多くの学生が在学中に社会で実用できる英語力を修得できる可能性が高くなる．

入学前の学力を高めさせるために，大学教員ができることはないだろうか．本学部の中位・下位クラスに所属する学生の多くが，東海大学付属高校出身者であるが，彼らを一貫教育の中で指導し，入学時の学力を上昇させることはできないだろうか．これが，学部開設時以来，ずっと抱いてきた問題であった．

3. 付属高校生の特徴

本学部では，毎年新入生の40%程度を付属高校出身者が占め，その多くが入学後のクラス分けテストの結果で中位～下位クラスに配置される．(クラス分けは，全学共通90分文法・読解・聴解のマークシート式テストと本学部独自の自由英作文を含む20分テストの結果で行う．）過去3年間の付属高校出身者の入学直後の配属クラスは，以下の通りである(Fig.1)．

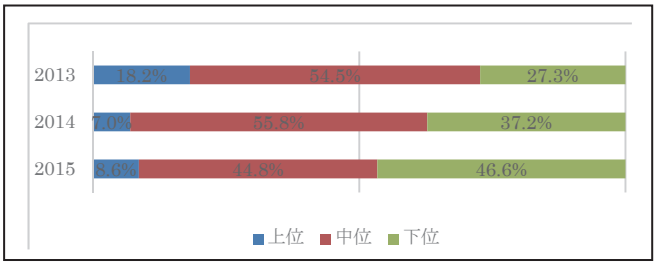

Fig.1 付属高校出身者の入学時クラス配置

東海大学付属高等学校は全国に14校あり，一貫した教育思想のもと，受験勉強に多大な時間を割くという偏った教育はせず，日常の学習・スポーツ・部活動などに励み，広く社会に目を向けた人間育成教育を行っている[7]．英語教育においては，2013年度まで東海大学教育開発研究所で教員指導が定期的に行われ[8]，教員間での協働教材作成や指導法研究が日常的に実施されており，指導環境は整っている．また，外国人教員による少人数クラスでの会話の授業も行っていて，多くの生徒はnon-native教員に慣れている．

しかし，受験を機に英文法を体系的に学習し，英単語を必死に覚えた一般入試経験者と比べると，入学時の試験で差が出るため，中位～下位クラスに配属される学生が多くなる（Fig.2)．

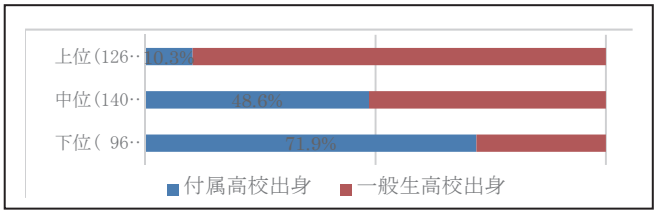

Fig.2 2015年度入学時付属高校出身者が占める割合

しかしその一方，2014年度と2015年度に学内で実施したTOEIC団体受験において，500点以上取得者60名のうち，19名(32%)が付属高校出身者であった(Fig.3)．入学時には上位に属する学生が10%程度であることを考慮すると，32%という数字は素晴らしい．さらに，500点以上を取得した19名中，13名（68.4%)が3～4年生であった．入学時に上位クラスに配属される付属高校出身者は少ないが，在学中に継続的に学習し，英語力を伸ばした学生が少なからずいることがわかる．

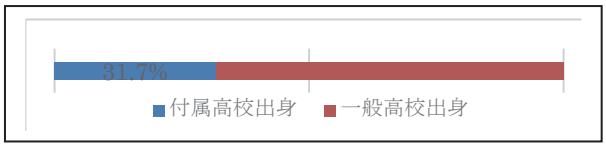

Fig.3 2014～2015年度TOEIC 500点以上取得者の割合

筆者は2015年度秋セメスタの必修英語科目において，中位レベル4クラスの95名を指導し(全8レベルの上から5～6番目クラス，5/8と6/8）そのうち49名(51.6%)が付属高校出身であった．その中の半数程度の学生に共通の雰囲気を感じた．彼らは，独自の英文を書くことや発言することに全く自信はないが，汎用的な構文のルールを教え，形式を少し与えて課題をさせると，英語の環境に慣れ親しんでいる雰囲気が見られ，楽しそうに取り組むのであった．潜在力を持ちながら，それが生かせてないように感じられた．以下に，同一クラス（6/8）の付属高校出身学生2名と一般高校出身学生2名の作文例を示す．これは，学期末に行った口頭発表の原稿であり，助動詞を4つ以上使って，自分のことを述べる，という条件で書いたものである．

I had entered the tennis club when the junior high school.
I want to play tennis well into the university .
I may go to the tennis club.
I should be the muscle training because muscle is less
It is because plans to enter the tennis part.
Then , it is necessary to study because results are poor .
The reason is because should the employment.
I would probably be busy.

Fig. 4 一般高校出身学生Aの原稿(下線は筆者による)

I went NOZI Hot Springs with my family in Hukusima prefecture in last year. There Springs can to enjoy hot springs different of five. I can enjoy very much ,but for a little period. There Springs is kind for skin, so my skin could have get well suffer from atopic dermatitis. I pleasant open air bath while see a snow. Because it's hard for me to get up early, Breakfast is hard have to sit by the time. That day must meet my sister before Hot Springs ,but good look healthy in a long time. Clerk said unusually little snow, but I am excited the snow of cold and smooth, because I don't quite see the snow. The snow would look to about my knee. I think it went to come with my family in last year.

Fig.5 一般高校出身学生Bの原稿(下線は筆者による)

一般高校出身の学生A(Fig.4)と学生B(Fig.5)の作文では,英文の基本ルール(明確なS+V,接続詞＋S+V,助動詞＋動詞，など）を授業で学習したにも関わらず正しく使えていない（実線箇所）．また，文章の流れ中で何を言いたいのかよくわからない箇所が多い（波線箇所）．

それに比べて，付属高校出身の学生C(Fig.6)と学生D(Fig.7)は，学習した英文構造のルールを理解して書いているため，文法的な間違いはほとんどない．また，話の流れがスムーズでわかりやすく，内容に興味が引かれる．

One day, I made an appointment with my teacher at the station to go shopping. I had to go there at 10 o'clock. But I had been late for appointed time. Because my teacher told me only appointed time and station name. I did not know detailed place. My teacher was very angry and shouted at me at the station. After day, I reflected very much. I must not be late for appointed time. When I will make appointment with somebody, I should decide a detailed place of appointed. And when I do not detailed place, I should call a cell phone.

Fig.6 付属高校出身学生Cの原稿(下線は筆者による)

I'm going to go to the United States and Italy with my friends in next summer because it goes to meet my friend. I can't speak English but they can speak English very well so I must study in this spring.
I like baseball and football so I want to see baseball in the United States and I want see football in Italy. But I don't have money. I must work hard in this winter. However, I can try both the work and the study hard if I think about summer vacation.

Fig.7 付属高校出身学生Dの原稿(下線は筆者による)

明らかに，学生A・Bと学生C・Dの英文を比べると，学生C・Dの方が英語を身近に経験していることが感じられる．学生C・Dは，第1セメスタでは下位クラス(7/8)の所属であったが，第2セメスタでクラスが1つ上がり中位クラス(6/8)になり，第3セメスタでは中位の中(5/8)に在籍しており，着実に力を伸ばしている．しかし，下位クラスからスタートしたため，第4セメスタ終了時に，上位近くにまで追いつける可能性はかなり低いと思われる．第1セメスタでもう少し上のレベルから始めていれば，第4セメスタ終了時には高い目標を目指せるレベルまで達したかもしれない，と残念に思われる．

4. 高大連携の試み

そこで，付属高校全14校のうち例年もっとも多くの生徒が入学するA高校の2016年度本学部入学予定者(46名)を対象に，入学前学習を試みることにした．

4.1 目的

中位～下位レベルの生徒に英文法を体系的に指導し，「考えればわかる」という自信を持たせ，英語に対する否定的な気持ちを捨てさせる．それにより，学習に前向きになり，入学時に 1 つでも上のクラスに配置され，意欲的な学生が多いクラスで学習を開始できることを目指す．

4.2 対象者と実施時期

付属 A 高校の情報通信学部入学予定の高校 3 年生 46 名の中で，中位以下と思われる生徒を対象に，入学前の 1 月～2 月に学習会を 6 回開催した．各回の学習時間は大学の授業と同じ 90 分である．

4.3 事前調査と実施準備

付属 A 高校の情報通信学部入学予定者に対し，高校教科書の既習箇所から 15 の文法項目を含む英作文テスト（付録 1）と英語学習に対する気持ちのアンケート（付録 2）を実施した．(入学予定者 46 名中，回答者は 43 名)

英作文において，ほぼ通じる英文を 8 割程度書けた生徒を中上級グループ(16 名)，5 割～7 割程度書けた生徒を中級グループ(15 名)，通じる英文が 5 割未満しか書けなかった生徒を初級グループ(12 名)とし，中級グループと初級グループにのみ，学習会に参加するように呼びかけた．

英語学習に対する気持ちのアンケートから次のことが分かった(Fig.8, Fig.9)．8 割近くの生徒が英語の学習を「苦痛」または「どちらかと言うと苦痛」と感じていて，楽しく学習する生徒が非常に少ない．特に初級の生徒は，ほとんど全員が「苦痛」または「どちらかと言うと苦痛」と回答した．しかし，学習意欲に関しては，7 割程度の生徒が「意欲がある」または「どちらかと言うと意欲がある」と回答し，初級では，8 割以上が意欲的な回答をした．これは，大学での学習を考えて回答したものと思われる．

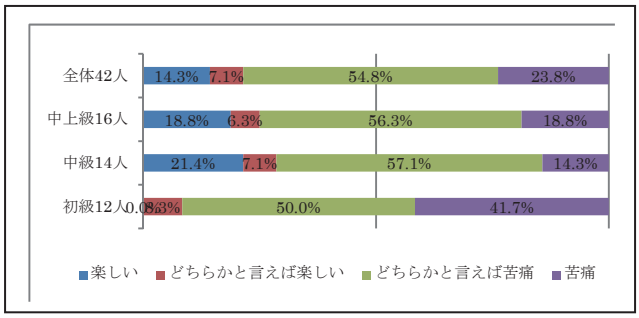

Fig.8 英語学習についての気持ち

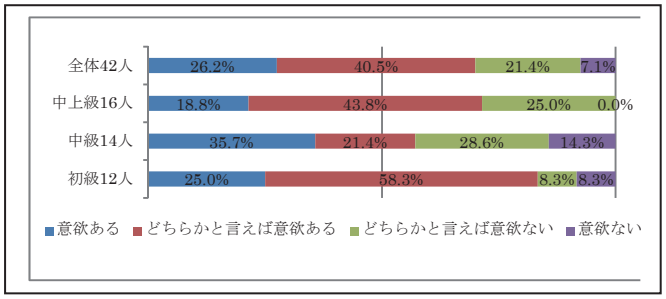

Fig.9 英語学習への意欲

英語の学習が「苦痛」または「どちらかと言うと苦痛」である主な理由（自由記述）は Fig.10 が示す通りで，上位 3 つが「わからない」ことが原因であることがわかる．

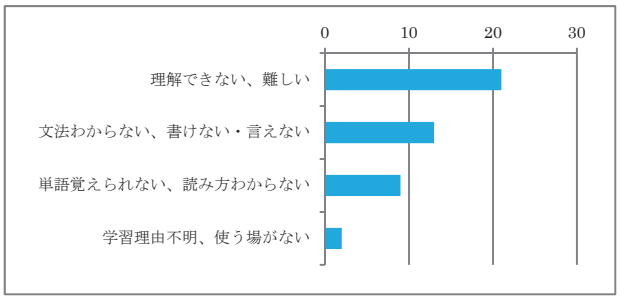

Fig.10 英語の学習が苦痛である理由(42 人,複数回答)

この調査結果から何を習得させることが効果的であるかを分析し，学習会の内容と方法を準備した．

4.4 実施内容

(1) 受講対象者

初級グループ(12 名)と中級グループ(15 名)に，各 90 分の学習会を 6 回ずつ実施し，中上級グループ(16 名)には，学習会を開催しなかった．しかし，希望者は中級グループの学習会に参加してよいことを連絡した．（結果的には中上級グループからの参加者は 1 人もいなかった．）

(2) 学習目標と指導項目

多くの生徒が「理解できない・書けない・言えない」と答えていることから，基本的英文構造を教え，「ルールを理解し，ルールに従って考えればわかる・書ける・言える」という自信を持たせるように学習させた．指導した文法項目は以下の通りである．

Table 1 入学前学習会 6 回の学習項目

初級グループ	中級グループ
現在形と過去形	一般動詞と be 動詞
一般動詞と be 動詞	不定詞と動名詞
疑問文と否定文	進行形と受動態
疑問詞付疑問文	現在分詞と過去分詞
助動詞	助動詞
前置詞	前置詞

(3) 学習方法

まずは，意識改革が必要であると考え，次の 2 点を学習会 6 回を通して伝え続けた．①英文を作成する時のルールに従って言葉を並べれば，通じる英文が作れる．②スペルミスなどの細かいことは気にしなくてよい．③書ければ話せる，書けないことは話せない．

そして，自分たちがふだん日本語で話す内容も，英文のルールに従って書けば通じる英文ができることを体験させた(付録 3)．言葉の並べ方に慣れ，通じる英文をたくさん書くことに集中させ，読める程度のスペルミスは気にしなくてよいこととした．毎回和文英訳の宿題をたくさん与え，自力で表現する訓練をさせた．授業では，板書させ，互いに訂正させ，不明な点を考えさせ，なぜそう書くのか理由を言わせた．「なんとなく」という返事は認めず，ルールで説明できることを認識させた．

そして，大学で学習する英語は，グローバル社会で仕事に使える英語であり，すべてを自分で表現できなければならないことを何度も伝えた．

5. 結果

5.1 学習会出席者の入学後のクラス

入学前学習会に出席した中級グループと初級グループの生徒の大学入学後の配属クラスを，入学前学習の出席率と比較した．中級グループでは，80%以上出席したに生徒のほとんどが中位クラスに配属され，1 名は上位に入った．参加率が低い生徒は半数が下位レベルに配置された(Fig.11 と Fig.12)．また，初級グループでは 80%以上参加した生徒は 3 割程度が中位クラスに配置され，参加率が低い生徒は全員下位クラスに配置された(Fig.13 と Fig.14)．80%以上参加した生徒は，概して高めのクラスに入る結果となった．

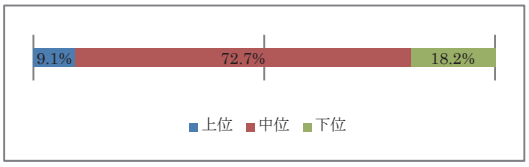

Fig.11 中級グループ学習会 80%以上参加学生 11 名の入学後配属クラス

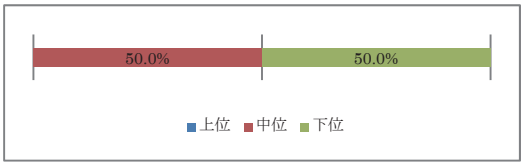

Fig.12 中級グループ学習会 80%未満参加学生 4 名の入学後配属レベル

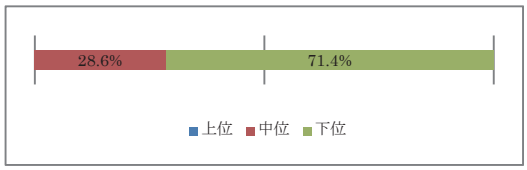

Fig. 13 初級グループ学習会 80%以上参加学生 7 名の入学後配属レベル

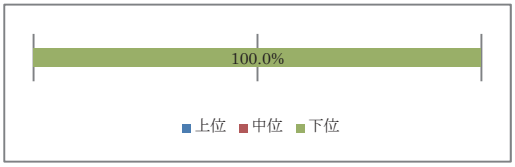

Fig. 14 初級グループ学習会 80%未満参加学生 5 名の入学後配属レベル

入学前学習会の事前英作文テストで中上級グループに振り分けられ，学習会に参加する必要なし，と言われた生徒のうち，25%が入学後下位クラスに配属され，中級グループで学習会に参加した生徒より低いクラスに配置される結果となった．

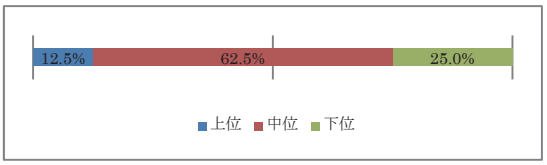

Fig. 15 上級グループ学生(学習会なし)16 名の入学後配属クラス

5.2 入学後のアンケート

大学入学後 4 週間経過したときに，入学前学習会に50%以上参加した学生22名に無記名でアンケート調査を実施した(付録 4)．質問項目は次の通りである．(1) 1 月～2 月の入学前学習会で，英文を書く時の理解が向上したと思うか．(2) 1 月～2 月の学習会の後，英語に触れるように心がけたか．(3) 1 月～2 月の英語の学習会は，入学後の学習意欲の向上に繋がったと思うか．(4) 来年度の入学予定者に対して，同様な学習会を実施することは有意義だと思うか．

結果は Fig. 16 に示す通りであり，次の 3 点が注目に値する．①90%の学生が，「英文作成の理解が向上したと思う」と回答した．②95%の学生が入学後の学習意欲について，「向上した」または「どちらかと言えば向上した」と回答した．③今後も入学前学習会を実施するべきか，との質問には，回答した学生の全員が「実施すべき」または「どちらかと言うと実施すべき」と回答した．

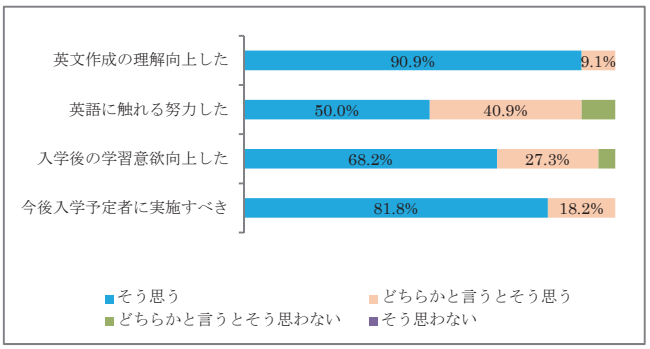

Fig. 16 学習会について入学後の気持ち
(50%以上出席者 22 名)

アンケートの自由記述欄には，12 名が回答した．複数の学生が回答した内容を以下に記述する．

(1) 英語の学習イメージ(視点) がわかった．3 名
(2) 大学での勉強についていけるようになった．2 名
(3) 好きになった．苦手意識が薄れた．2 名
(4) 書ける・理解できるようになった．2 名
(5) 学習のきっかけとなった．2 名

6. 考察

東海大学情報通信学部の英語プログラムでは，様々な工夫をして段階的に学力を高める指導をしてきているが，中位～下位クラスに配属される学生を，学部が目標とする「専門分野の内容を英語で発表できる」レベルに近づけることができないことが，悩みの種であった．大学での学習開始レベルが少しでも上がれば，目標に近づくことができ，学習意欲も高まるのではないかと考え，付属 A 高校の情報通信学部入学予定者に，入学前学習会を行った．英文法を体系的に理解させ，「基本に従って考えればわかる」という気持ちを持たせ，意欲的に英語の学習に取り組めるようになることを目指した．

ほんの 6 回の学習会に参加したことで，入学後の英語クラスが上がったかどうかは明らかでないが，参加した学生の方が参加しなかった学生より，比較的多く上のクラスに配置されたことから，効果がなかったわけではなさそうだ．しかし，それよりも重要なのは，90%の学生が「英文作成の理解が向上したと思う」と回答した点であろう．英文を書くことに少し自信が持てるようになった表れであると判断できる．

さらに，入学後の学習意欲の向上について，ほとんどの学生が肯定的に回答したことは，今後の学力向上に期待ができる結果であった．また，学習会後に英語に触れるように心がけた学生が 90%いたことも，学習会の意義を示す結果と言える．

そして，学習会に参加した学生の全員が，自分たちの後輩も入学前学習会に参加した方がよいと思っていることから，彼らが本学習会で何か有意義な体験したと感じてくれたことがわかる．

大きな問題となる 1 点は，事前の英作文調査から，中上位グループレベルの学力があると判断され，学

習会参加は不要と通達された生徒のうち 4 人が，入学後下位クラスに配置されたことである．高校教科書の既習英文から調査の問題を作成したため，英文の基本ルールを理解していなくても，普段から暗記学習をしていれば英文が書けた可能性が高い．この 4 人には，学習会への参加を強く促さなかったために，気の毒な結果となってしまった．1 回だけの調査で学力を見極めることは難しいため，今後，学習会を実施するなら，1 回目は全員に受講させ，学力レベルを慎重に判断する必要があると思われる．

7. まとめ

グローバル社会で仕事ができる人材が緊急に必要とされており，大学での英語教育では自ら考え・発信できる力の育成がますます重要となってきている．受験勉強に振り回されることなく，日常の学習・スポーツ・部活動などの中で，広く社会に目を向けて教育を受けた付属高校生が，その潜在力をグローバル社会で活用できる力に変えていくことを目指し，早い段階から高い目標に向かった学習を開始させられる環境を準備することを提案したい．

大学での学習の意義を感じ，学ぶことが「苦痛」ではなく「楽しい」と感じる活動となるよう，今後，どのような形で高校と連携していくべきかを考える必要がある．今回は，その第1歩として入学前学習会を試みた．社会に貢献できる東海大学生を育てるために，時代に合った，様々な可能性を学園の教員全体で考えていくことが大切ではないかと思う．

参考文献

1) 文部科学省：新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について（中央教育審議会答申），http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf，2014

2) 岡田礼子，中山千佐子：情報通信学部の英語教育プログラム―理念と初年度前期の実践―，東海大学紀要情報通信学部 Vol.1，No.2，pp1-6，2009

3) 岡田礼子・中山千佐子・ヴィーンストラ ジェイ：初年次教育での学習習慣と意欲の喚起―教員連携と学生の自主管理に向けて―，初年次教育学会誌 第 2 巻 第 1 号，pp64-71，2009

4) 岡田礼子：「プレゼンテーション演習II」2年目の取り組み，東海大学紀要情報通信学部 Vol.4，No.1，pp53-58，2011

5) 岡田礼子：主体的学習を促すTOEIC®受験支援，東海大学教育研究所　研究資料集 No.22，pp45-54，2014

6) 岡田礼子：主体的学習を促すTOEIC®受験支援―2年目の課題―，東海大学紀要情報通信学部 Vol.8 No.2，pp30-34，2015

7) 浦安高校HP http://www.urayasu.tokai.ed.jp/senior_intro/index.html

8) Tokai University RIED, Looking toward the future, TDE/NET Work Seminar 2011

付録1　第1回英作文テスト

英文で表現しなさい。完璧な英文をめざさなくてよい。スペリング不明の場合は、読んでもらえそうに書けばよい。どうしても書けなければカタカナでもよい。不明な語は □ にしてもよい。空白のままは ×。

1.	春にはたくさんの人が日本を訪れます。
2.	週に1度外食しますが、来週は外食しません。
3.	電話が鳴っていますよ。私が出ましょう。
4.	この人は私のあこがれの人(ヒーロー)です。
5.	東京は、日本の中心にあります。
6.	日本には、4つの主要な島があります。main island
7.	次の月曜までにこの熟語を覚わらせなければなりません。
8.	あなたたちは、ここにいてもいいですよ。
9.	サッカーは世界中で行われています。
10.	君を起こすために、ドアをノックしましたよ。wake
11	抱き合うこと(ハグすること)は、フランスでは一般的です。common
12.	私はどうしたらよい(何をしたらよい)のか、わからない。
13.	小さかったころ(とき)、学校へ歩いて行きました。
14	彼女が勝ち取った賞金は、100万円以上でした。prize money
15.	僕はダンスが習える学校に入学したいです。

付録2　第1回意識調査

英語の学習は楽しいか，苦痛か？	楽しい	どちらかと言えば楽しい	どちらかと言えば苦痛	苦痛
	何が？なぜ？ どうすれば楽しくなるか？			
英語の学習意欲があるか，ないか？	意欲ある	どちらかと言えば意欲ある	どちらかと言えば意欲ない	意欲ない
	なぜ？ どうすれば意欲的になれそうか？			

付録 3　助動詞を学習後の練習例

1. 先生にメールを送ったんだけど、手紙も書いたほうがいいかな？
2. 毎日野球するから、夕食前にシャワーを浴びなきゃならないんだ。
3. 妹はよく傘をなくすんだ。今日も傘を地下鉄の中に忘れるだろうな。
4. この雑誌借りてもいい？あした返すから。これ読みたかったんだ。
5. 大学では、授業の前に 1 時間以上勉強しなくちゃならない。忙しいだろうな。

付録 4　入学後 4 週間目のアンケート

1月～2月に実施した入学前英語学習会に関するアンケート

（今後の入学前学習の改善のための調査にご協力ください。成績とは無関係です。）

このアンケートの結果は、研究のための論文のデータとしてのみ使用しますので、個人が特定されることはありません。公表に関して同意できない場合は、右記のボックスにチェックを入れてください。→□

	そう思う	どちらかと言うとそう思う	どちらかと言うとそう思わない	そう思わない
1月～2月の英語の学習会で、英文を書く時に何に気を付けるべきか、理解が向上しましたと思いますか。				
1月～2月の英語の学習会の後、入学までの間に、英語に触れるように心がけましたか。				
1月～2月の英語の学習会は、入学後の学習意欲の向上に繋がったと思いますか。				
来年度の入学予定者に対して、同様な学習会を実施することは有意義だと思いますか。				

入学前の学習会について、自由にご意見を書いていただけますか。今後の付属高校生の指導の改善に役立てます。

ご協力ありがとうございました。（岡田礼子）